

難波西鶴と

海の道

【13】

森田 雅也

数回にわたり、西鶴が北海道からの正確な情報を駆使して、作品化していった例をあげました。それでは、西鶴はその北海道松前からの情報をどのように得たのでしょうか。

とがあり、確かな交渉ルートを持っていたとは考えられないでしょうか。

無難な答えは、西回り航路に従事している、水主も含めた人々から伝聞したり、取材したという可能性でしょう。しかし、西鶴が直接、松前に行ったこ

とが、自由には行けないということですが、「入り鉄砲に出女」はあまりに有名な言葉ですが、幕府が諸大名の謀反を警戒して、各

とが、自由には行けないということですが、「入り鉄砲に出女」はあまりに有名な言葉ですが、幕府が諸大名の謀反を警戒して、各

西鶴の足跡を検証

砲の江戸への持ち込みと、江戸在住の諸大名の妻女が領地へ戻ることを厳しく取り締まったことを指している。

江戸時代の通行許可には「関所手形」と「往来手形」が必要でしたが、男子の関所通過が大概所持する往来手形の検閲を受けるのみなのに対し、女子が通るには二書以外にもかなりの手続きがありました(『国史大辞典』)。

とはいっても、男子なら誰でもどこへでも行くことができたわけではありません。そこには、相応の理由が必要でした。

最も一般的な理由は、商品流通にかかわ

っている、つまり商用でした。そうすると西鶴自身が物流関係の商人であればこそ、簡単に北海道まで行けたということになりません。その業種をさらに推測するならば、各地からの大坂登り米をぎばいていた米商人が、現地の買い付けが必要という理由で、最も可能性の高い職種と言えます。

西鶴の『好色一代男』は主人公「世之介」の一代記と言えますが、巻四の七で父の莫大な遺産を受け継ぎ、「大大大じん」となります。本来なら働かなくてもいい大金持ちですから、巻五以降は多く、高級な遊女と世之介の恋物語

が描かれています。ところが、巻七の五の世之介は唐突に、「出羽の国庄内といふ所へ下りて、米など調えて」と、遠く東北の庄内まで、米の買い付けのために大坂からやってくる米商人という設定になっているのです。それではなぜ世之介は、この章だけ米商人というビジネスマンになっているのでしょうか。それはうかつにも西鶴自身が物語に出てきてしまったからではないでしょうか。かかることを検証するために、次回からは西鶴と東北編が始まります。

(関西学院大学文学部文学言語学専攻)

確かな交渉ルートあった？